
ありがちな設定のありがちな話 ~リリカルなのはStrikerS~

スキアヴォーナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ありがちな設定のありがちな話 ～リリカルなのはStrike
～

【ISBNコード】

N 8 1 3 7 Y

【作者名】

スキアヴォーナ

【あらすじ】

目的の違う5人の人物が、1人の女性の下へと集う。各自の目的を果たす為に。そして彼らと出会う機動六課をはじめとする管理局の魔導師達…そんな感じのリリカルなのはの一次創作です。

プロローグ（前書き）

この小説は、魔法少女リリカルなのはStrikersの一次創作です。

オリキャラが多数登場します。

（プロローグで全員顔出しさせますが）

設定がベッタベタかつ、中二臭い要素あります。

作者はどちらかとレジアス擁護のアンチ六課氣味ですかといって、理不尽な設定・キャラ改変、メアリー・スーの予定は無いです。

オリキャラは強設定ですが、俺TUEEEEの要素の予定も無いです。

六課と拮抗するくらいの実力のつもりで進めていきます。

更新速度はかなり不定期になると思われます。

作者の文才はかなり低いです。でもそれを言い訳にするつもりはありません

誤字脱字の報告、設定の矛盾、要望、意見などありましたどんどん下さい。

ただ、ガラスのハートですので、あまりにも理不尽な感想はやめてください。

（具体的な指摘も無しに、ヘタクソだの書くのやめるとかの感想を書くとか）

以上のこと踏まえた上で、お読みください。

プロローグ

-新暦66年、第18管理世界のとある都市の市街にて

「…ちくしょう」

暗闇の中、月明かりが一人の少年を照らしている。

黒い髪、黒い瞳のその少年は、着ている白いパーカーのポケットに両手を突っ込んでいる。

その表情に浮かんでいるのはあからさまな怒り。

それも、やり場のない理不尽な怒りに震えているものであった。

「…ちくしょう…！」

歯を食いしばったまま、少年は再び呟く

少年がいる路地裏には、彼以外の人間はいない。

他にいるのは散らばっている生ゴミをついつい、数羽のカラスぐらいである。

「…ちくしょう…！」

少年は、今度は声を張り上げて叫び、近くにあつたゴミ箱を思い切り蹴飛ばす。

その音に驚いたカラス達は、月が浮かぶ夜空へと舞い上がる。

「何でだ…！何でなんだよッ…！…！」

拳を握りしめながら俯き、少年・タツマ・ノダは絞りだすような声でまた呟く。

こんなことをしても何にもならない。それは少年自身がよくわかつていた。

だが、かといって自分がこれからどうすればいいのかさえわからぬいのだ。

「父さん…母さん…サヤカ…」

数年前まで一緒にいた。みんなで笑って幸せな日々を過ごしていた。が…それが5年前、脆くも崩れ去った。

自分以外の家族が皆殺しにされた。生き残ったのはタシマ一人だけだった。

家族を殺した奴らへの復讐、その為だけにタシマは管理局員になつた。

彼の両親も魔導師だった。故に彼の自身にも魔法の素質は宿っていた。

管理局でメキメキと腕を上げていく中、タシマは家族を殺した連中が何者なのか知つた。

そいつらを捕まえて法の裁きを受けさせる。それがタシマの絶対の目標だった。

しかし、1年前にそれは決して叶うことのない目標へと変わってしまった。

そのあまりにも理不尽な結果に、タシマは怒り狂つた。

だが、一局員でしかないタシマの我儘が通る筈もなかつた。

そしてやり場のない怒りを抱えたまま、タシマは管理局を辞めた。

そして、今は自分の故郷である世界で、空虚な日々を過ごしていた。自分がどうすればいいかわからない、家族の敵すらとれない。いや、それを行おうとすれば自分が悪者になる、そんな状況であつ

たのだ。

「クソツ…クソツ…クソツ……」

怒りに任せそのまま、タツマは辺り一面に広がる「川」を蹴り散らかす。自分一人では何もできない。そんな自分の無力をさひたすらに呪いながら。

「…いい年こいた男が、なーにをやつてるんだか」

ふと、自分以外誰もいない路地裏に氣怠そうな声が響き渡る。タツマはその声のした方へと振り向く。

「なあ? アンタはそんなことをしてるだけで満足なのかい?」

そこにいたのは、ボサボサのオレンジ色の髪で、顔に多数のそばかすがある

白衣を纏つた眼鏡の女性であつた。

「…なにが言いたい」

不快な感情を隠そうともせずに、タツマは女性に向かつて言い放つ。心の奥底では、憂や晴らしにコロイドを痛ぶつてやうつかとさえ考えていた。

「アンタの目を見りやわかるだ。自分一人じゃビリじよつもなくて迷つているガキ」

アンタの顔は正にそれだからね

「……言わせておけば…」のババア…!

しかし女性は、飄々とした態度で、タツマに向かって言葉を放つ。タツマはそのまま言葉に更なる怒りを覚え、反射的に女性に向かって殴りかかる。

「せうやつてすぐ真に受けて暴力…ガキそのものじゃないか…」

「…？」

だが、タツマの放った拳は女性に当たることなく空振りする。瞬時に体を横に捻つたまま、女性はタツマに足払いをかける。

「がッ…！」

タツマはすぐに体の自由を失い、わけのわからぬまま俯せに倒れ込む。女性はすかさず倒れたタツマの上にのしかかり、彼の両腕を捻り上げた。

「…けどさ、アタイはそういう奴は嫌いじゃないぜ？」

タツマに乘っかつたまま、女性は何故か笑顔のまま更にこう続けた。

「アタイと一緒に来れば、アンタのやりたい事も出来るかもな？」

*

- 新暦69年、第14管理世界、とある研究所にて。

「…データ摘出完了。実験段階は次のステージへと進めます」

「「J」苦労、検体にスリープ処理を施せ、今日はここまでだ」

数人の研究員が報告書片手に報告を行い、それを聞いた主任が指示を出す。

管理局に知られることのない違法な研究施設。

そこで彼らは「ある」対象物をひたすらに研究していた。

「睡眠装置起動、タイプ・ダブルゼロ、スリープモードへの移行を開始します」

研究員はポッドの前でパネルを操作していく。

そのポッドの中にいるのは、白い検体衣に身を包み

多数のチューブによって繋がれた青髪の少年であった。

少年は人形のようにピクリとも表情を変えることなく、ただひたすらに前だけを見ていた。

「「J」の実験が進めば我が研究所の技術も飛躍的に上がる。そうすれば…」

「ああ…忌々しい管理局の連中をねじ伏せ、独立することも夢ではない」

ポッドの少年を見つめながら、研究員と主任が下品な笑みを浮かべる。

管理局によつて、今までの研究成果の殆どが違法認定される中

ある管理外世界で見つけたのが、その少年であった。

研究者達は、自分の満足いくデータを取る為に

少年に対して数々の非人道的な実験を繰り返してきていた。

そのことに対する彼らは心を痛めるることは全くない。

自分達が拾つてきた研究材料に、何をしようがお構いなしという心持ちであった。

「……」

少年は何も感じていない。いや、考へることすら放棄していた。
ここに来る前の自分の過去は何も思い出せない。
脳裏に過るのは、過酷な実験の日々だけである。
自分がなぜこのような体になってしまったのか、自分がどうしてこうなったのか

そんなことが全くわからないでいたのだ。
やがて思い至ったのは考へるだけ無駄だということ。
自分はこの研究施設で、彼らの道具として使い続けられ、やがた死ぬ。
そう思い、何もかもをあきらめていたのだ。

しかし「」の日、そんな少年の考へが改まることになる。

「？…異常事態だと？…侵入者…なつ…！」

研究員の一人が突如、異変を感じてモニターを覗き込む。
見ると、自分達のいる研究室に向かって、凄まじい勢いで移動している人物がいた。

「何事だ！」

「侵入者ですー」このメインラボに一直線に…ぐああ…」

主任が慌てて立ち上がり、それに研究員の一人が答えようとするが
次の瞬間、研究員は血飛沫を巻き散らして床へと倒れ込む。

「えーっと…おおっと、ここでいみたいだな

その背後に立っていたのは、和服のよつなバリアジャケットを纏い一振りの日本刀型デバイスを手にした黒髪の少年であった。

「な、なな…何者だ…！」

「ああ、悪いけど説明すんの面倒くさこからさ」

恐怖でガクガクと震える主任に対して、抑揚のない声で少年は答える。

次の瞬間、主任の眼前に映つたのは、ギラリと光る日本刀の刃であった。

「やーーと、ここつをこつやつてと…」

数分後、研究所のメインラボに立っていたのは少年一人だけであった。

血の海の中では少年は、楽しげな雰囲気で淡淡と、ポッドの前で操作を続けていた。

「これをポチつと…おお動いた動いた！」

少年は最後に赤いボタンを押す。

すると、ポッドの中にいる少年を繋いだチューブが次々と外されていき

ポッドの外壁が上へと上昇していく。

「……？」

ポッドの中こいた青髪の少年は、無表情ながらも口感いを浮かべていた。

自分を解放した田の前の少年は何者なのか？何故今になつてこんな事が起こっているのか？

「いや～しつかしこうこのつに何かスゲえよな！
全身機械のサイボーグ、機人のプロトタイプーこれこそロマンつて感じでああ」

黒髪の少年はお構いなしに田をキラキラさせながらそなこと言つている。

この場の状況に、あまりに似合わない極めて不自然な内容である。青髪の少年の方にしてみれば、まるで意味不明な状況であった。

『ぐだりんお喋りをしてなにでさつせと連れて帰つてこい。タシマ
「ああひとワリいワリい。すぐ戻るからわ』

ふと、黒髪の少年・タシマのデバイスから通信音声が発せられる。その声の主に対して、片手を挙げて軽いノリでタシマは謝る。そして、その後に青髪の少年へと手を差し伸べた。

「助けに来たんだ、俺と一緒に来ないか？楽しく生きようぜ？」

*

-新暦70年、第6管理世界、アルザスの地・ル・ルシエの里にて
里の関係者以外誰も知る筈のない辺境の洞窟、その中を一人の男が
進んでいた。

男は肩まで伸びる銀色のロングヘア、真紅に染まつたその両目は
敵対した人間を睨むだけで戦意を喪失させるような、そんな凄みを
醸し出していた。

また、目だけでなく、全身からもどこか、近寄りがたいオーラを発
している。

男がそんな禍々しい雰囲気を纏つに至っているのは彼の出自が原因
である。

男は生まれた時から戦場の最中にいた。物心ついた時から武器を手
にして戦っていた。

自分達弱い民を迫害する国家。それに対抗するレジスタンスとして
男は戦っていた。

そして男の姉は、レジスタンスのリーダーでもあった。

男は姉から生き残る為の術として、戦いを教わっていた。

しかし、そんな自分の境遇を恨んだことなど一度もない。

自分を愛し、自分の為に戦っていた姉の事を、男もまた尊敬し、愛
していた。

だが、国家とレジスタンスの戦いは、管理局の介入という形で一方
的に戦局が傾いていく。

管理世界でもあり、管理局との繋がりも深かつた国の政府は

管理局本局へと応援を要請し、その圧倒的な力でレジスタンスを蹂躪した。

そして…レジスタンスのリーダーであつた男の姉は管理局の介入に怖気づいた、レジスタンスの幹部達の、自己保身の道具として売られたのだ。

責任の全てを押し付けられた彼女は、大勢の国民の前で大々的に処刑された。

その時の光景を、男は今でも鮮明に覚えている。

剣が振り下ろされ、姉の体からその首が離れた瞬間、男は誓つた。必ず姉の敵を取る。その為に力を蓄える。自分達を見捨てたこの国を消す為に、と。

男はそうして裏の世界へと消え、そして数年前にある女性と出会った。

そして、利害関係の一致からその女性の下へと身を置き

今はこうして、女性の頼みでこの辺境の地へと赴いているのだ。

「…ここだな」

男は洞窟の最奥部、巨大な扉の前へと立つ。

そして、手にした銃型のデバイスに魔力を込め、魔力弾を形成する。

「…消す」

収束された魔力弾が、扉に向かって一直線に飛んでいき、爆発を起こす。

爆風の晴れた先には、巨大な穴の開いた扉がある。

男はテバイスをしまつと、その扉の先へと進んでいった。

「こいつか…」

男がポソリと呟く。扉の先にあつたのは、蠟燭の光で照らされた、薄暗い一つの牢獄。その中にいるのは薄汚い布きれを身に纏つた、金髪のくびつとした目をした小さな少女。その少女に抱えられている、黒龍の雛であつた。

「こじちゃん、だあれ？」

少女は入ってきた男を見るなり、キョトンとした表情でやつ尋ねる。

「あ、あたしクラム、クラム・ル・ルシウットのーこじちゃんの名前はなあに？」

尋ねてもいないのに少女・クラムは自己紹介をする。男は黙つて少女を見守り続けるだけだ。

普通の子供なら、それだけで恐怖のあまり逃げ出すのが普通だったのだが

「でね、この子の名前がヒリザベートこいつのー可愛いでしょー。」

クラムはやつこつて笑顔を浮かべて、自分の手の中で眠る龍の紹介まで始める。

「ねーねー聞いてよこじちゃん。あたしねえ、このヒーラーの為にお

友達を描いてあげたんだよ？

そしたらエリーもすっごい喜んでくれたのにさあ
それを見た里のおじいちゃんやおばあちゃん達にエリーの友達とら
れちゃったの

そしたらあたしとエリーをこんな所に閉じ込めたりしたんだよ！
ねえ、なんでかなあ？あたしはエリーにお友達を作つてあげただけ
なのに…』

「…黙れ、消すぞ」

反応のない男に対し、自分の身の上話まで始めるクラム。

その態度に少々イラついた男は、デバイスの銃を取り出し、クラム
に向ける。

「ほえ〜それカッコいいね！ねえねえ、それは何ていうおもちゃな
の？」

ところが、そんな脅しもなんのその、クラムは鉄格子の前までテク
テク歩いていき

興味津々な表情で、男の持つデバイスを見上げている。

「…おいエスティ…本当にこのガキで間違いないのか？」

『一応はな、データの年齢や外見とも一致している』

頭の痛くなってきた男は、たまらず協力者である女性と通信を取る。
話の通りとはいえ、ここまで常識外れな少女が目標だとは思つてい
なかつたからだ。

『とにかくアンタの目的はそいつの確保だ、なるべく手短に頼むさ
ね』

「…チツ」

内心で若干の惡々しさを感じじつも、男はクラムの幽閉されている牢獄へと近づいく。

「…ねえ、にいちゃん。はやくにいちゃんの名前を教えてよ～」

が、男の心境も知らずにクラムはふくーつと顔を膨らませる。

男は手にした『デバイスの銃』に魔力刃を形成し、それによつて牢獄を破壊しながら口を開いた。

「…『ラフエスト…ラフエスト・デュアリスだ』

*

-新暦72年、第58管理世界、管理局支部の建物内にて。

管理局員の制服を身に纏つた女性が、会議場へと向かっていた。しかし女性は管理局員ではない。今日の会議に集まる管理局の幹部を殺すために

局員に扮して、この場所に潜入しているのである。

「…これから始まるのね、私の戦いが

腰まで届く燃えるような赤いロングヘアの女性・パレットは、胸に手を当ててポツリと呟く。

・どうしてよ！なんで×××が連れていかれないやいけないのよ！
・パパもママも何か言つてよーどうして何もしないのよ！

・返してよー私の弟を返してよーーーー！

田を開じれば、いつも鮮明に思い出すことのできるあの日の記憶。自分の家族を引き裂いた、人生で最悪の出来事が起こったあの日。何もしなかつた愚かな父と母はとうの昔に見限つている。そして、自分の助けたかった、たった一人の人間が、今ビヒで何をしているのかも知つている。

しかし、パレットはまだ、その人物と会つつもりはなかつた。必至に抵抗したとはいえ、自分の両親と同じように何も出来なかつたあの日の自分が許せないのである。
そのけじめをつけるまで、あの子と会つわけにはいかない。そう心に決めていた。

そして長い間独学で力を身につけ、こうして、家族を引き裂いた連中のいる場所へと来ている。

全てに片を付け、例え血塗られた両腕であつたとしても、自分の中でけじめをつけた上で、あの子を抱きしめて、そして謝ろう。

あの日^{おひ}なることが出来なくてごめん、と。

そんな思いを胸に、パレットは会議室の前まで来て、扉をノックす

る。

「……おかしいわね……」

だが、中から反応は返つてこない。手箸通りなら局員から中に入る
ように言われ
その隙をついて中の人間を全員殺す手筈であった筈なのだ。

「返事がないわ……どうなってるの……？」

妙な胸騒ぎを感じつつも、パレットはゆっくりと扉を開ける。

「……これは……」

その次に視界に入ってきた光景は、あまりにも予想外の物であった。
殺す筈だった局員たちが、全員後頭部から大量の血を出しながら突
つ伏していたのだ。

パレットは動揺を隠せないまま、部屋の中を見渡す。

「あれ? まいったなあ……」んな所見られちまつとは……
「…………」

次にパレットの目に映ったのは、血塗られた日本刀型デバイスを持
ち、困ったように咳くタツマと
水色のロングコートと長いマフラーを纏つた青髪の少年であった。

*

-新暦75年、ミッドチルダ南部、アルトセイム地方のある屋敷

「おっはよーーー！」

屋敷の食堂に入ってきたのは、ハイテンションに片手を上げて挨拶をするタツマである。

「もう…遅いわよタツマ、他のみんなはもう食べ終わってるわよ
いや、ワリいワリい…徹夜でゲームしてたら寝坊しちまってさあ

それに答えるのはテーブルの片づけをしていたパレットである。タツマはパレットに対して、軽いノリで謝罪をする。

「朝っぱらからひみせい奴だ…」

それに対して反応を示すのは、テーブルでデバイスの整備をしていたラフェストだ。

「なんだよラフェスト～お前は相変わらず暗いな～」

「黙れ、貴様の様に無駄なことはしない主義なだけだ」

「無駄じゃね～ぜ？こないだ発売した新作ゲームが楽しくってさあお前もちつとはそういう趣味見つけたらビーよ？でないと人生樂しく生きられないぜ？」

「つむせ～…消すぞ」

タツマのハイテンションな会話にイラつき、ラフェストは整備していたデバイスを向ける。

そんな光景をして、パレットはまたかといった感じの表情で溜

息を吐いていた。

「タツマに、一ちゃんもラフェストに、一ちゃんも、喧嘩はだめだよ～」

そんな二人の間に割つて入るのがクラムと、彼女の肩に乗る黒竜、エリザベートである。

クラムは両手をバタバタさせながら、一人を交互に見つめていた。

「大丈夫だつてクラム、にいちゃん達は喧嘩なんてしてないよ～」

「ほえ？ そうなの？」

「うんうん、そうだよ～」

タツマはにんまりと笑いながらしゃがみ込み、クラムの頭を撫でてやる。

クラムはキヨトンとしながらも、されるがままに気もち良さそうにしていた。

「…チツ」

一方のラフェストは舌打ちをした後、再びデバイスの整備に没頭する。

「……」

そしてラフェストの隣に座る青髪の少年・オスカーは無言のままその光景を見ていた。

タツマはそのオスカーの隣へと座り、冷め始めていたトーストにかぶりつく。

「よお、起きてるかお前ら」

と、その段になつて食堂にて、白衣を纏つたオレンジ髪のセバカすの女性が姿を現す。

「おふ、おふあ ようえふでー（おう、おはよウエスティ）」

「おはよウギヤ こま すエスティさん」

「おはよウな ハスティ おばさん！ー！」

タツマ、パレット、クラムの三人が女性・エスティ・トウディにに対して挨拶をする。

（タツマは口にトーストを頬張つたままであつたが）

ラフェストは無反応、オスカーは無言のまま顔を少し下げた。

それぞれの反応を見た後、エスティは一番奥の席へと座り、そして話を始める。

「ほんじや、今日のアタイらの仕事についてなんだが…」

*

それぞれ目的の違つイレギュラー達…

新暦75年、彼らの集つミツドナルダにて、正史とは異なる物語が始まろうとしていた。

オリジナルキャラ紹介（小説更新共に随時更新）

タツマ・ノダ：21歳・男性

デバイス：日輪、月輪（和服のようなバリアジャケットと一振りの日本刀型のデバイス）

黒髪で黒い瞳、過去に、何者かによって両親と妹を殺されている。

オスカー：17歳・男性

デバイス：プロトナックル、フリーズキャリバー（ライトブルーのロングコートと

マフラーのバリアジャケット。）

青髪で無口な少年、ある研究施設に捕らわれていた、タイプ・ダブルゼロと呼ばれる戦闘機人

ラフェスト・デュアリス：21歳・男性

デバイス：バラベラム（銃型のデバイス）

銀色のロングヘアに真紅の瞳

ある管理世界のレジスタンスとして戦っていたが、管理局に姉を殺される。

以来、世界への復讐のために力を蓄えている。

パレット：18歳・女性

デバイス：ペルデルス（槍型のデバイス）

腰まで届く赤いロングヘアの女性。

ある人物と再会する為に、自分の中でけじめをつける為の戦いをしている。

クラム・ル・ルシエ：8歳・女性

デバイス：フンケル（ブーストデバイス、詳細不明）

金髪のくつろとした目の少女。エリザベートといつ黒竜を使役している。

ある理由で、里の者たちによつて幽閉されていた。

エリザベート：雌

クラムが使役している青眼の黒竜。愛称エリー。普段は彼女の肩に乗れる程度のサイズだが

大の大人を頭から噛み千切れんくらいまで巨大化出来る。

エスティ・トウディ：48歳・女性

ボサボサのオレンジの髪、そばかす、眼鏡、白衣を纏つた女性。

上記5人を束ねていること以外、現時点での詳しいプロフィールは不明。

第1話・目的、新設部隊

第38無人世界、人が全く存在しない無人の世界の密林。

「ハア…ハア…ゼエツ…！」

その中を、一人の男がケースを抱えながら必死に駆けている。自分の命を刈り取ろうとする者から逃げるために。

「ちくしょう…何なんだよアイツ、らは…！」

呼吸も荒く、若干涙目になりながら必死に走る。

男はロストロギアを転売しながら生計を立てている、云わば裏の人間であつた。

今日もまたいつものように獲物を発見し、それを手にしようとその時、

突如として現れた二人組によつて襲撃され、殺されそうになつたところを

上手く隙をついて、こうして必死に逃げ惑つてゐるのだ。

転送用に使つた、自分の持つ小型の次元航行船、そこまで辿り着く為に。

「おーい、鬼！」これはおしまいだぜオッサン」

「な…ヒイー！」

が、辿り着く遙か前に、自分の命を狙う死神がいつの間にか、自分の前に立っていた。

男は情けない声をあげて、その場に倒れ込んでしまつ。

「さつきは悪かつたつて…それ渡してくれれば見逃してやるからさ…な？」

二人組のうちの一人、タツマは場の雰囲気に似合わない、明るい表情を浮かべている。

その隣に立っているオスカーは、相変わらずの無表情で沈黙を保つていた。

「ふ、ふざけんな！こいつは俺の久々の獲物なんだ！」

だが、命の危険とわかつていても、男は獲物を横取りされたくない一心で、そんなことを言つてしまつ。

その反応を見たタツマは、やれやれと言つた感じに首を振り、待機中の「」のデバイスを取り出す。

「行くぜ、日輪、月輪」

次の瞬間、タツマは光に包まれ、和服風のバリアジャケットを纏い二振りの日本刀型デバイス・日輪がちりんと月輪がちりんを手に持つていた。

「…フリーズキャリバー、起動…」

それに合わせるようにオスカーも自分のデバイスを起動。

ライトブルーを基調にしたロングコートとマフラーのバリアジャケットに加え

右腕にアームドデバイス・プロトナックルと

両足にローラースケート型のデバイス・フリーズキャリバーを装着する。

「うわあああ！！！」

その変貌に驚いた男は、再び悲鳴を上げてその場から逃げようとするも

「グヘッ！！」

「……」

立ち上がるうとした瞬間、足を取られて盛大にスツ 転んでしまう。見ると、オスカーの立つ位置から男の立つ地面にかけてが、一直線に氷結していた。

「…ナックルダスター」

オスカーは足下に水色のベルカ式魔法陣を開
右腕を振り上げて、プロトナックルを高速回転させる。

「…ヒット

次の瞬間、弾丸のような速さで突撃したオスカーは
すれ違い様に、倒れた男の顎に向かつて、右手のナックルでアッパーをかける。

その膨大な破壊力によつて、男は一瞬で意識を刈り取られ、上空高くへと舞い上がる。

その更に上空で、両手のデバイスを構えたタツマが待機していた。

「おりやーー！剣技・三日月斬！！」

左手に持つた月輪を振り上げ、やたらと稚拙な感じの漂う技名と共に
男に向かつて急降下しながら、月輪を思い切り振り下ろす。

男は胴体に刻まれた三日月型の傷から血飛沫をあげながら、地面へと逆効果して激突した。

そして一人は、倒れた男のことなどもくれずに、男の持っていたケースを拾い上げる。

「な、な、オスカーどうだつたよ？俺の三日月斬は？」

昨日読んだ漫画のキャラの技を真似てみたんだけさあ

「…目標物回収…帰還しよう、タツマ」

「おーい？無視しないでくれー微妙に傷つくなー」

途中、タツマは嬉々としながら、自分の新技の感想を尋ねるもオスカーは回収したケースを手にしながら、淡々と語るのみであった。

予想していたとはいえ、タツマは少し凹んでしまう。

「しつかし、エステイは今度は何の研究をするつもりなのかねえ…」

期待の反応を返してくれなかつたオスカーは一旦置いておきタツマは今回の目標物であるケース・レリックをまじまじと見ながらそう呟いた。

*

第82管理外世界、管理局が関知している世界の中でも一際治安の悪い世界。

「いたか！？」

「いやいない…あの野郎、組織の金盗んでどこにきやがった…！」
そんな世界のあるスラム街の一角に、数人のチンピラが集まっていた。

チンピラ達のグループは、そのスラム街の中でも群を抜いて大きくその保有する財力も、管理局通貨で換算しても、かなりの量を誇つていた。

しかし、その財力の基である金塊の山が、根こそぎ奪われてしまったのである。

チンピラ達は犯人を必死に探し回っていたが、なかなかどうしてこれが見つからない。

だが、組織の金を盗まれたとあっては、チンピラ達も必死であった。

ピシュン！！

「グア！」

が、刹那、何か鋭い音がしたかと思うと、チンピラの一人が頭から

血を吹きだして倒れる。

「！… オイ！」

「撃たれただと…」

「近くにいるひとことだな… ビーにいやがる…」

それが犯人の攻撃によるものだと察知したチンピラ達は、辺りを警戒し始める。

その数秒後、黒いロングコートを纏つた銀髪の男が姿を現す。

「テメエ…！」

男の姿を見たチンピラ達は、ナイフやら拳銃やらを手に、一斉に男に向かって襲い掛かる。

男・ラフェストはさして慌てる様子も無く、自分の相棒であるデバイスを取り出す。

「行くぞ、パラベラム」

相棒の名前を呼ぶのと同時に、左足を軸に180°回転

同時に銃型デバイス・パラベラムから魔力弾を発射し、背後にいたチンピラの頭を撃ち抜く。

「消す」

今度はデバイスのモードを変更、両手を大きく広げて銃を構えて四方にいた4人のチンピラの、左胸を正確に撃ち抜く。

「消す」

更に右足を軸に上へと飛び上がり、両手を前に構えて魔力弾を発射。残っていたチンピラ達の急所を、一発で撃ち抜いていく。

「な……あ……」

その間わずか数秒足らず、凄まじいまでの早業である。

最後に残ったチンピラは、何が何だかわからぬまま、呆然と立ち尽くす。

「消す」

抑揚の全くない声で呟いた後、ラフェストは最後の獲物に対しても、容赦なく引き金を引いた。

死体の山の真ん中に立ちつくし、ラフェストはデバイスを待機モードへ移行させる。

彼らの戦いは一種類、各々の目的に直結するものと、エスティ個人の依頼があった。

今回のラフェストの場合は後者であり、自分達組織の資金の調達の為に

管理外世界の裕福なチンピラから金を頂くというラフェストからしてみれば、実にくだらない戦いであった。

「チツ…あのババアめ…協力関係とはいえ俺をこんなことに使いやがつて…

こういう任務は、あの単純バカに任せればいいものを…」

自分にとつて不本意な任務であつたため、ラフェストはイラつきながら一人愚痴つていた。

*

第91管理外世界、そこに存在する非合法の研究施設にて

「た、助け…「アックア・パロト」ぎやあああ！…！」

研究員の一人が、高速で放たれた水の弾丸に体を貫かれる。その背後に立っていたのは、自分の背丈ほどもある大型の槍型デバイス ベルテルスを構えたパレット。身に纏うバリアジャケットは、簡素な作りの、赤を基調とした鎧のような物である。

「な、何者なんだ貴様は！い、一体何が目的だ！？」

別の研究員が恐怖に打ち震えながら、必死に声を振り出して叫ぶ。管理局にさえ知られていない、非法の研究所

そこを突如襲撃してきたのが、目の前にいるこのパレットである。

彼女は研究所内にいた、僅か4名程の研究員を、無言のまま次々と惨殺していったのだ。

ただ一人残った研究員は、わけがわからず混乱するばかり目の前のこの女に、自分達が殺される理由が全く見いだせなかつたのだ。

「新暦68年…プロジェクト…」

と、その段になつて、パレットが研究員に向かつてぼそぼそと何かを呟く。

それを聞き取つた研究員はハッとして、ある一つの答えへとたどり着いた。

「その髪の色…まさか…お前はあの検体の…」

研究員がそう呟いた瞬間、冷酷な表情を浮かべてパレットは手にした槍を振り上げる。

「うわあああああーーー！」

恐怖に駆られた研究員は、反射的に後ろに振り向いて慌てて駆け出す。

そして窓ガラスを突き破つて、研究所の外へと出た。

だが、研究員を待ち構えていたのは更なる絶望であった。

「グルルルル…」

「…………く……？」

研究員の田の前にいたのは、青く鋭く光る両目を持つた巨大な黒色のドラゴン。

この場にいるはずのない生物を田にして、研究員は頭が真っ白になります。呆然とします。

次の瞬間、研究員の視界が真っ黒に染まる。

そして数秒後、研究員の首から上は、胴体から丸々消えてしまつていた。

「もう、ダメだよエリー！ そんなの食べたらお腹壊すよ！」
「キューーん……」

研究員を捕食したエリーに対し、そのすぐ近くにいたクラムが人差し指立てて、彼女に怒る。

因みに両腕には彼女のデバイスであるブーストデバイス・フンケルンが装着されている。

それに対しエリーは、先程までの強暴そうな表情とは打って変わつてしまふばかりした表情になる。

「エリーが仕留めてくれたのね」

その様子を遠目に見ていたパレットが、デバイスを片手に一人と一匹の方へと歩み寄つてくる。

「『じめんねパレットねえちゃん… ねえちゃんの田標だったのにエリーが勝手に…』

パレットの姿を見て、今度はクラムがしょんぼりとしてしまう。そんな彼女に対し、パレットはにっこり笑つてこう答える。

「大丈夫よ、寧ろありがとう。田標が逃げる前に仕留めてくれて」「…ほえ？ エリーねえちゃん、怒つてないの？」

「ええ、怒つてないわ」

パレットの言葉を聞いて、クラムは沈んでいた表情をぱあっと明るくさせ、ぴょんぴょん飛び跳ねる。

その様子が可愛らしくて、パレットも自然に笑顔になる。

今回のパレットの戦いは前者、即ち自分の目的の為である。そこに、たまたま手の空いていたクラムとエリーが同行していた。エスティの得た情報から、この世界に自分の追う敵の何人かがいると聞いて

こうしてやつてきていたのだった。

(これで計1~2人… けど全員殺すまで私のけじめはつかない…
あの子に… 面と向かつて謝る為にも…)

心の中で呟きながら、パレットは胸に下げていたペンダントを手に取る。

その中にある写真に写っているのは幼い頃のパレットともう一人彼女よりも一回り小さい、赤色の短髪の少年であった。

*

ミシド南部、アルセイム地方の屋敷

「機動六課ねえ…」

5人がそれぞれの任務に赴いていた中
エスティは自室のソファに腰かけ、頬杖をつきながら、
目の前のモニターに映る情報に目を通していた。

調べているのは管理局の新設部隊について。

Lost Property Riot Force 6 古代遺
物管理部機動六課。

名前の通り古代遺物、即ちロストロギア関連の事件の解決を中心とす
る、

50人弱のメンバーで構成された、試験的な部隊だ。

しかし、エスティはこの部隊のことを、どうも胡散臭く感じていた。

「ロストロギア相手とはいえ…ここまでの戦力がいるものなのかな
え…」

目を細めながら、もう一度構成員のリストへと目を向ける。

部隊長であり、歩くロストロギアとも呼ばれる、SSランクの魔導
師、八神はやてを筆頭に

航空戦技教導隊所属の、誰もが知るエースオブエース、高町なのは

一等空尉

上記の一等空尉と関係が深く、これまたエース級の実力者、フェイ
ト・T・ハラオウン執務官

本局航空隊1312部隊所属のヴィータ二等空尉に、首都航空隊所
属のシグナム一等空尉

隊長格全員が、管理局でいうエース級、AAAランク以上の実力の
保持者であった。

この5人だけでも、お釣りが来そうな過剰戦力なのだが。
その他の構成員も、前線、管制共に、将来有望なエリートで固めら
れている。

客観的に見れば、過剰を通り越していじめに等しい戦力の部隊な
である。

(おまけに…)

目を更に細めて、今度は新人メンバーの名前の方へと視線を移す。

陸士108部隊隊長、ゲンヤの娘であるスバル・ナカジマ
首都航空隊のエリート空士、ティーダの妹であるティアナ・ランス
ター

10歳という年齢でありながら、既にBランクの実力者であるエリ
オ・モンディアル
竜召喚という、希少なスキルを持つキャロ・ル・ルシド
隊長陣と比べれば見劣りするとはいえ、

その全てが、立派に前線で戦えるだけの実力を持つメンバーだと言
える。

しかし、エスティにとつての懸念事項は他にあつた。

「何の因果か知らないが…ウチの連中とはち会わせたくない奴らば

つかりだねえ…

困ったもんだよホントに…」

ガリガリと頭を引っ搔きながらエステイは愚痴る。
自分が捨い、ある意味自分が育ててきたともいえる5人の魔導師達。
その全員が、この機動六課のメンバーと、大なり小なり関わりがあるのだ。

建前上は協力者でしかないとはいえ

今の自分にとって、5人が貴重な戦力であるのもまた事実。
今後の自分の活動に、大きな支障が出そうな事は、エステイにあっては悩みの種である。

「しかも…バックにいるのがこいつらとくるか…」

ため息を一つ吐きながら、モニターを操作して別の画面を映し出す。
ロストロギアを扱うのが主とはいえ、ここまで過剰戦力が揃つた
部隊の新設など

常識的に考えれば、不可能に決まっていることくらい誰でもわかる。
が、部隊が規格外であれば、その背後にあるのもまた、規格外の人間ばかりであった。

後見人とされるのは、本局の重鎮の一人である、リングディ・ハラオ
ウン総務統括官

その息子である、これまた本局エリートの、クロノ・ハラオウン提督。

そして、確定情報ではないのだが、上記二人の後見人に加え
かの有名な、伝説の三提督までもが関わっているという情報がある
のだ。

膨大な数の次元世界を束ねている、時空管理局本局。その実質的なトップ達が関わっているとなれば、

このような無茶がまかり通っているのも、ある程度理解はできる。

それを踏まえた上で、エスティは、顎に手を当て考え込む。

(「ここまで過剰戦力に、三提督…何か裏があるのは当然だね…」)

では、そこまでの地盤を固めてまで、このよつた部隊を作った理由は何なのか？

少し頭のいい人間なら、単にロストロギア取締りの強化が目的の部隊なんていう、単純な考えには至らないのはある種の必然である。そのような人間の一人であつたエスティもまた、

この機動六課には、何か別の大きな目的で、動いているであろう事を見抜いていた。

「…まあ、現段階じゃあ確実な情報が少ないのも確かだわな」

そう言つてエスティはモニターの電源を切ると、ソファーを半回転させる。

日の光が差し込む巨大な装飾窓、その先に映る美しい草原。自分たちのような裏の人間が隠れ住むには、酷く不釣り合いなことは、エスティも承知していた。

「レジイの奴が知つたら、また頭を抱えるだろうねえ…」

ケラケラと笑いながら、かつての友人の一人である人物の顔を思い浮かべる。

本局を忌み嫌つてゐる彼にとつては、このよつた過剰部隊の新設など頭痛の種どころか、单なる邪魔者でしかないだらうことは、容易に

想像できるものであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8137y/>

ありがちな設定のありがちな話 ~リリカルなのはStrikerS~
2011年11月24日21時54分発行